

Title	書評: 藤田弘夫著 『奥井復太郎：都市社会学と生活論の創始者』 東信堂、2000年
Sub Title	
Author	熊田, 俊郎(Kumada, Toshio)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2001
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.6 (2001.) ,p.103- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20010000-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：藤田 弘夫著

『奥井復太郎—都市社会学と生活論の創始者』東信堂、2000年

熊田 俊郎

一流の研究は妥当な祖述者または解説者を得て初めて一流となる、筆者にはそのように思える時がある。M. ウェーバー然り、E. デュルケーム然り。奥井復太郎は都市社会学の教科書、概説書、講座に必ずその創始者として名を記される研究者である。しかしながら戦前期の孤高の業績として言及されるだけ、あるいは戦後の研究活動の組織者として畏敬の念をこめて回顧あるいは懐古されるだけという側面が少なからずあった。もちろんこれまでもたとえば『現代大都市論』の復刊や日本都市学会による論文集の編集を契機に奥井の都市論が論じられたことがあった。今回奥井都市論をめぐる研究が多くなされている背景には、言うまでもなく川合隆男、山岸健、藤田弘夫監修になる『奥井復太郎著作集』（大空社 1996）の刊行がある。そして今回の奥井都市論ブームの特徴の一つに、初めて本格的な評伝である本書が書かれたことを挙げてよいのではないか。本書は小さいながらも奥井を回顧の対象から研究の対象への道筋をつけた著作といえるであろう。研究対象となることによって奥井の正当な評価が生まれることが期待できる。

内容を紹介すると次のようになる。全体は3章および付録からなり、第1章奥井復太郎の人と業績、第2章都市と地域生活の社会学、第3章奥井復太郎の評価と影響、付録として著作リスト、参考文献、年表からなる。

第1章は奥井の遺族を含む関係者へのインタビューを踏まえて書かれた年譜である。しかし単なる年譜に留まらず、奥井の学問的な立場や都市観を形成する社会環境に重点をおいた記述がなされている。生まれは下谷ながら育ちは本郷になる。本郷は山の手に分類される地域であるが、通学した小学校などの説明から官員を中心とした「山の手」的な環境とは異質の商人などからなる地域社会の環境の中で育ったことが記される。また大正期に学生時代を送り、日本の高等教育制度の変革期の中で、やや外在的理由で専門を選んだこと、留学先のドイツでまさにコミュニティであった中世都市の名残りに関心を持ったことが描かれる。さらに研究活動のほか大学行政や研究の組織者として活躍する後半生に言及する。

第2章は本文の半分以上を占める本書の中核部分である。この章は、8節からなりそれぞれの節がまず奥井の都市観、都市理論、(都市)社会調査という理論および方法、つぎに都市地域構造、都市文化、都市地域組織という都市論の本体部分、最後に国土計画・都市計画を含む計画論、都市化社会における生活論という都市論の応用部分を説明・分析し、奥井都市論の全

体像を描こうとしている。著者が強調していることは都市が「結節機能の地域的結集」という原理によって成り立つ地理的場所であるという認識をもとに都市の全体社会での位置付けやその内部構造・内部過程の研究を行い、研究の総合化をしているという点である。

第3章は奥井の評価と影響である。ここで興味深いのは、著者が都市結節機能論、都市と全体社会の関係、都市社会調査、町内会「文化型」に至る地域集団論、都市計画、国民生活・生活構造論の6項目にわたり(7項目目の都市社会学への影響は一般論なので別にして)奥井の影響を論じていることである。

本書のような評伝の著作を批評することは難しい。著作の批評なのか著作の対象である奥井の批評なのか書いていて区別できなくなる恐れがあるからである。自戒しながら若干の感想を述べてみたい。まず著者の藤田弘夫氏といえば、都市社会学者として華々しい活躍をされている。しかし忘れてならないのは、藤田氏の社会学史の研究者としての側面である。同氏が社会学史に関して著作をなすとき、名のみ有名でその実が意外に知られていない人物の業績を丹念に掘り起こすという仕事をされる方である、という印象を私は持っている。また学説をそれ自体完結したものとしてでなく、社会的、歴史的背景の中で考察するという志向を強く持っている方でもある。本書はこのような藤田氏の特徴が過不足なく発揮されたものといえるのではないか。幼時の生育環境が、盛り場への関心や町内会を見る眼に確固たる基盤を提供しているようである。書物によって奥井を知るわれわれの世代にとって初めて知る貴重な情報が盛り込まれている。重要なインフォーマントであるご息子が鬼籍に入られたことを思えば、なおさらその思いを強くする。

しかしその奥井の(古臭い表現だが)存在拘束性というか背後仮説というかそのためにアプローチしにくくなった都市の側面はないのだろうか。奥井が都市研究を本格化させた1920年代から30年代は日本の都市のありようが大きく変わった時代であろう。江戸時代以来の「町」という一種ゲマインシャフト的な地域社会の集合体としての大都市が、全体としてゲゼルシャフト化していくとも言えようか。日本もヨーロッパも古い都市はコミュニティ的なものを内包させた形で長く存続し、変質してきた。古いコミュニティに精通していた奥井は安易な反都市論に与しなかったが、一方で近隣社会に関する限り変化を扱う方法が不十分だったのではないか。それが、社会解体化やセグリゲーションという道具立てのシカゴ学派流の輸入学問が主流になった理由ではないだろうか。ないものねだりをすれば、本書に藤田氏が考える奥井の限界に関する記述が欲しかった。

奥井の影響について、藤田氏の指摘はきわめて興味深いものである。第1点の都市の結節機能説について、筆者はある席(公式の場でなく酒席であったが)で鈴木栄太郎の北海道大学における最後のお弟子さんの世代に属する方に、『都市社会学原理』に奥井への言及がないが藤田氏が指摘するような影響関係はあるかどうか伺ったことがある。十分に可能性があるという返事であった。執筆当時鈴木はかなり病気が進行し、典拠などに精力を割くよりも研究を完成させることに集中していたため引用が不十分になった可能性がある、とのことであった。町内

会論にしても、今日学界の共有財産となっている知見が奥井の影響下に発展したものと藤田氏は明確に指摘している。これはきわめて重要な指摘である。

藤田氏が奥井の「影響」の項で論じる世界都市論はどうであろうか。たしかに奥井の著作を見るとその先見性に驚かされる。80年代に一般的となる世界都市という用語を戦前の『現代大都市論』の中で使っている。しかも世界経済の中で経済活動の核となる都市を意味し、今日的な用法で使っている。しかし時代的に先行することと影響関係は別である。もちろん藤田氏は奥井の影響で世界都市論が出現したとは言っていない。やや紛らわしいところでその先見性を論じたと言えるかもしれない。

最後に藤田氏の奥井への評価について考えてみよう。奥井の特徴は都市思想から理論、調査、政策に至るまで体系化した点にあるという。そして理論欠如のシカゴ学派に対比させている。藤田氏が理論ということで想定しているものは、都市の本質、すなわちなぜ人や物や機関施設などが都市という狭域に集積するのかという原理的説明のこのようである。たしかにシカゴ学派的研究では都市の原理的説明がないままに、人口や機関が巨大に集積する都市において何が起るのかについての、膨大な命題群が立てられる。理論とは何かということは学問分野ごとに異なり、原理的説明を当該分野の理論と考えれば藤田氏の評価はまったく正しく賛成である。

視点を換えてなぜ戦後の日本の都市研究がシカゴ学派的なものに向かったのか考えてみよう。単に当時の社会学がアメリカ一辺倒だったからというだけではないように思われる。たとえば社会解体化論がある。都市化が進行すると伝統的社会的紐帯が消滅する、という命題がある。都市化および社会紐帯の消滅を各研究者が操作的に定義すれば、検証可能な言明ができる。命題を肯定するにせよ否定するにせよ、明らかな目的をもった調査が可能になる。筆者自身かつてその末席に加えてもらった横須賀調査でこの枠組みによる研究を行ったことがある。たとえ理論を欠いていようと検証可能な命題を導出できる枠組みは便利なのである。もちろん便利さに寄りかかる膨大な調査が不毛になりやすいということは、藤田氏が常々指摘されているところである。論理実証主義的科学観に立てば、理論は検証可能な命題をどれだけ導出できるかということによってその豊かさが量られる。論理実証主義とは異なる行き方もあるかもしれない。ただわれわれは奥井の理論から命題を導出する努力をしてこなかったように思われる。借り物の命題でないほうが、実は調査も豊かなものになったかもしれないのである。

最後にこれまで奥井について書かれたものは多く、奥井の同時代人ないしその講筵に直接列した人たちの論評であった。ここに奥井に距離をおいて評価する世代が出現した。本書は、書物によって奥井を学ぶ世代がまず最初に手に取るべき著作となろう。その上で奥井から何を汲み取れるかは我々自身の手にかかっているようである。藤田氏の著作と奥井の業績と混同が甚だしくなりそうなので、小論を終ることにしたい。

[本体価格 1,800 円]

(くまだ としお 駿河台大学法学部)